

# 異文化理解を見据えた小学校外国語科の授業デザイン（要旨） —ALT との交流研修と参加教師へのインタビューの考察を通して—

学校構想サブプログラム

小本 翔

【指導教員】 磯田 三津子 及川 賢 野村 泰朗

【キーワード】 異文化理解 外国語 小学校 ALT 研修会

## 1. 課題設定

小学校外国語科においては、授業者は日本とは異なる環境で生活してきた ALT が持つ固有の価値観や風習を学習者に紹介することを通して、異文化に関する好奇心を育み、他の文化との差異について自発的な問いが生まれることが大切である。その為には授業を共にする ALT を理解し、対話を生む関係性を構築することが前提となる。そこで、本研究では小学校外国語科において、ALT とのチームティーチング (TT) の在り方について問い直し、外国語科における「異文化理解」の視点を取り入れた授業の在り方について考察する。

## 2. 外国語教育において求められる異文化理解と現状

異文化理解とは、まず自分とは異なる人々を認め「自分のものの見方が唯一の見方」という思考から抜け出し、異なる文化をもつ人々の考え方を受け入れ、その違いも立場によって正しいものであると理解することであり、それによって学習者は自分自身や自らの帰属先、価値観を内省することができるようになるのである。しかし外国語教育の研修は主に4技能（話す・聞く・読む・書く）の定着及び評価に係る内容に偏っており、「異文化理解」を意識した授業が十分に実践できていないのが現状である。

## 3. 研究内容

前述した課題意識に基づいて、本研究では以下の三つの手続きに従って研究を行った。

- ① 外国語教育における異文化理解の意義について理論的に明らかにした。
- ② ALT の文化的背景を知るための校内研修を開発し、2022年7月埼玉県入間市教区センターにおいて市内の ALT 計 11 名と入間市立狭山小学校の TT を組む担任教員 18 名を交える交流研修を実施した。

- ③ 研修後に授業者へインタビューを実施し、自身の外国語科への見方と ALT との連携にどのような変容があったかを調査した。

上記の③の調査結果では「ALT 自身が抱く強み」も「自国の文化を紹介できること」と深く関連していることが明らかになった。また、それを基に「外国語を教える部分」と「文化を扱う部分」に分類する授業デザインの考え方を整理した。

## 4. 結果と今後の課題

本研究では、前述した研究手続きに従って考察・検討を行った結果、以下の3点が明らかとなった。

- ① 外国語教育（小学校外国語）では、4技能の習得に向けても、異文化理解を深めることがそれらの技能を育成するための基盤として重要な意味がある。
- ② ALT への理解を深めることのできる交流研修会が、授業デザインにおいて授業者が彼らを効果的に活用するための契機となる。
- ③ 授業者が ALT と協働し異文化を紹介する場面においては、学習者自身が自文化を問い直し、自発的な問いが生まれる成果を導き出すことができた。

以上の事から外国語科における異文化理解は、ALT の活用及び理解が不可欠であることが示唆される。学習者のコミュニケーション能力や外国語に対する学習意欲を高めるためにも、異文化理解を見据えた授業デザインの在り方と ALT との交流を深める研修会の検討が今後も必要である。

### 【主な参考文献】

佐藤 謙 (1999) 『国際化と教育—異文化間教育の視点から』放送大学教育振興会。  
フランシス・カルトン著 堀晋也訳 (2015) 「異文化間教育とは何か」西山教行・細川英雄・大木充編『異文化間教育とは何か—グローバル人材育成のために』くろしお出版 P9-22。